

金剛界曼荼羅

(042)

「金剛頂經」という經典にもとずいて描かれたものである。
全体を九等分するので「九会曼荼羅」とも呼ばれている。

諸仏・諸菩薩を九つのグループに分けて千四百六十一尊が描かれている。

大悲胎藏生曼荼羅は大日如来の心の世界を表し「理のマンダラ」

金剛界曼荼羅は大日如来の頭脳の世界を表し「智のマンダラ」

「理」と「智」の曼荼羅は、それぞれ異なった世界を表し、その二つの世界は二つにして二つでない。

つまり一つの世界である、なぜそれで一枚に描かないのかと言えば、一つにして二つだから。

これを 金胎不二

胎藏曼荼羅で教えられた

精進を怠らない
とらわれを断つ

他人の苦しみを引き受ける
人々に安らぎを与える

によって、あとは、自分の能力と人間らしさを開いていかねばならない。

その仕組みが金剛界曼荼羅である。

東

曼荼羅構成図

北

四印会 金剛法 金剛宝,大日,金剛業 金剛薩	一印会 大日如来	理趣会 愛金剛 触金剛,金剛薩,慢金剛 欲金剛
供養会	成身会	降三世会
微細会	三昧耶会	降三世 三昧耶会

第7 降三世会（降三世三昧耶会を含む） 「安きにつく心に慈悲の怒り」

降三世の姿は不動明王のように炎を背負い、手に剣を振りかざし、足で二体の邪鬼を踏みつけている。

これは、「三世」 貪（人の底なしの欲望）

瞋（すぐに腹を立てる怒り）

痴（人の道理を知ろうとしない愚かさ）

を降伏させようとして怒っている、つまり、人間の煩惱に立ち向かう姿である。

思いやる心が強いほど怒りの表情が強くなる、しかし、そこに仏たちの目から漏れる慈悲の光を感じて煩惱をテコにいのちの力の向きを、大衆の利益の側へ変えようと教えている。

第6 理趣会

「ハンディを自己表現の活力に」

ここでは、大日如来に代わって、真ん中を金剛薩が位置を占めている。いつも、中心となれる生き方の教えでも人は失敗して転落することもあれば、傷ついて落ち込んでしまいうこともある。こうした傷つきやすい要素、つまりハン

ディとは、煩惱そのものである。なかでも愛欲である。

男と女の愛欲・自己愛も物への愛着も、広い意味の愛欲である。とくに、それは次から次と欲望がエスカレートして、満たされることなく、正常な判断を狂わせる。ではこのハンディをどう処理すればいいのだろうか。

普通は、煩惱を断つことでハンディを乗り越えるが、ここではいかに、うまく煩惱を調節するか、そしてどう生かしていくか、それができれば煩惱即菩提、つまり、煩惱がそのままよりよく生きることにつながる。

金剛薩を取り巻いて「欲」「触」「愛」「慢」の4人の男と

「意生」「髻利吉羅」「愛樂」「意氣」の女のペアが教えることは、煩惱の断ち方ではなく、煩惱の生かしきたである。

一組目…生き方を転換する力を煩惱に求める。

自分の中に秘められている力を信じて、逆境を順境へ転じる。わが身は自分本位の欲望にとらわれることが多いのだが、それを大衆のために転じることで、つまり、小欲から大欲へ転じることで思いがけない飛躍が可能。

二組目…没落の側に傾いたのを煩惱の力で復元させる。

見たり食べたりしたいという感覚的な欲望の淵

にあって、いつも深くに落ち込む危険にさらされているが、内に蔵している菩提心が復元力を発揮して人間性を保てる。

三組目…怠けて眠りつづける根性を煩惱の力で喝をいれる。

男女の愛欲に溺れそうになり、物に執着しがちな人生にあって、そんな迷いと眠りに喝を入れ、正道へ導く。

四組目…煩惱の力をうまく生かすことで目的へ進む推進力を強める。無知なために仮の姿でしかないものに満足し、愚かなことを自慢していたのだが、いったん正道を知ると、その道を進む力も人一倍となる。

第5 一印会

「なぜ仏を胸に迎えないのか」

ここでは、表情は柔和な大日如来が一人で智拳印を結び、智恵と命の総元締めとしての決意の堅さを感じさせる。

しかし、からだ全体の印象は、身構えたような硬さのない自然体である。何物にも壊されることのない真実の智恵

というのは、第一印象の硬さとは違って、実に柔軟性に富んでいる。しかも、宇宙に存在する一切の総元締めである。よって、ここでは大日如来一体だが、そこに、なにもかもひっくるめられている。

一つは、そのまま一切なのである（一即一切）

しかし、あくまで一体である（一切即一）

つまり、大日如来は宇宙の整いぶりの中における、このわたしの小さないのちのありかたを教えてくれる。

仏が私に入り、私が仏に入る。早く私になるのです、わたしを胸のなかに迎えられないのか。

「入我我入」

第4 四印会

「目先の欲望にとらわれない」

中央は大日如来だが

東…金剛薩

鈴を振って迷いの中に眠る人を目覚めさせる。

鈴の音で目覚めさせ、右手の智恵のシンボルであ

る五鈷杵を振りかざして、汚れた世界に住んでいるからといって、仏になるのを諦めないで、さあ早くと促す。

南…金剛宝菩薩

清らかな心の花を開かせよと促す

左手で開き始めた蓮華を見せ、諦めることはない、ほれ、この蓮華を見るが良い。泥の中咲いて、これほど清浄ではないかと、右手で早く近づいて来いと手招きしている。

西…金剛法菩薩

目覚めた人に仏の智恵をさずける

どうしてこれを受け取りにやって来ないかと、幸せの詰まった宝の珠を前に突き出している。

北…金剛業菩薩

仏のように尊い行動をとれとすすめる

手にした蓮華台に二つの三鈷杵がクロスされているのは、仏の働きと人間の働きが、もともと同じなのだということを示している。だから、いつまでも目先の欲望にとらわれる愚かさを捨てて、仏の始めなさい。思い立ちすれば、何も難しい事は

ないと教えている。

迷いの多い暮らしから足を洗って、真実の智恵を身につけ、もともと心中にある美しい花のつぼみを、早く咲かせなさい

第3 供養会

「感謝の気持ちを素直に表せるか」

普通、供養といえば仏前に金品を供えることが頭に浮かぶ。その場合でも、尊いのは金品でなく、それにこめられている敬いと感謝の気持ちである。だから、仏前で読経するだけでも供養だし、ただ合掌するだけでも仏の徳を讃え、感謝する心がこめられていれば立派な供養である。

そうした供養をすることで、誰よりもまず、供養した人がすがすがしい気分になることができる。ふつうは損得とか利害を先行させたりするが、供養の場合はそういった計算ぬきで、こちらが率先して感謝と尊敬の気持ちを表現し、相手もまた尊敬と感謝の気持ちを返してくる。

六種供養 仏前に供える六種の品にちなんで、供養の心の表し方を教えている。

閼伽^{あか}… 仏前に水を供える

これによって欲望を控えて、それによって生まれ
たゆとりを、他に施す布施の働き。

塗香^{ずこう}… 両手にお香を塗る

匂いのいいお香によって得られる清浄な気持ちは、
約束事を守ったすがしさ（持戒）に通じる。

華鬘^{けまん}… 仏前に花を供える

花によって心が和み、腹立ちや怒りが鎮まる（忍
辱）

焼香^{しょうこう}… 抹香を焼いたり、線香を立てる

線香が一直線に燃えていくように精進する。

灯明^{とうみょう}… 仏前に献灯する

智慧の光となって迷いの闇を晴らしてくれる。

飯食^{おんじき}… 仏飯を供える

適度の食事は心の安らぎ（禅定）をもたらしてく
れる。

第2 微細会

「暮らしの模様をキメ細かく」

微細会の仏は頭の後ろに三鉢杵の端をのぞかせている。

三鉢杵は密教に欠かせない仏具の一つで、金剛杵とも呼ば
れる通り、ダイヤモンドのように硬くて壊れない智慧のシ

ンボルである。

だから、毎日をみずみずしく充実して過ごそうという意
志を強く持とうと促してきているのだが、それだけではな
い。

三鉢杵は手のひらに乗るほどの小さな仏具だが、その造
形の中に深い意味がこめられていることを仏たちは訴えて
いる。

そこに仏の智慧ももっているし、先端が三本に分れて
いる部分には仏のからだと言葉と心が秘められている。

そうした形にこめられた心を知ると、自然
界の現象、風景までもが今までとは違った受けとめ方が出来
るようになってくる。

花が咲いて散る見なれた光景でも、そこに仏の心が宿っ
ているという見方をすると、太陽の光線や風や気温のぐあ
いまでも素直に喜べるし、花は無心でありながら、虫を誘
い、花粉を運ばせ、また孢子によって種を遠くに運ぶ。そ
うした営みに生命力の強さを感じる。

自然の造形と営みは、まさに微細である。

一つの無駄もなく、どれほどの不足もない。そうして周
囲とうまく調和している。

そういった微細さを読みとることで人生は豊になつてい
く。美しいものや調和のとれたものを讃え、やさしく細や
かな心配りを感動をもって受けとめる。

そういうキメの細かさを暮らしにとり入れることで、人生は長短の尺度だけでは計れない充実感を持つことができる。

つまり、ものにこめられた心を読む。

第1 成身会（三昧耶会を含む）

「今日をみずみずしく生きる」

真ん中に大日如来、東に阿しゆく、南に宝生、西に無量寿、北に不空成就の如来とおのおの四人の菩薩で

阿しゆくは決意（発心）の確かさを示し、

宝生は怠りなく努力（修行）し、

無量寿は悟りを求める心（菩提）をゆるぎなくし、

不空成就は絶対的な安らぎ（涅槃）を得ることを示している。

胎蔵マंडラで十段の修行をし、さらに密教流に生きる

「四つの鍵」

精進を怠らない

とらわれを断つ

最初にあった他人の苦しみを引き受ける

人々に安らぎを与えるを得て発心、修行、菩提、涅槃

の四つの宝を開いて行くのである。

つまり、自己完成し表情が生き生きとし、生きた、この

身のまま仏になることのすばらしさを示している。

四つの鍵を得て、修行を重ねてこそ今日の充足感があり、そしてこの修業をつづけることで、もう心の貧しい時代に帰らなくてすむ、そのことを不空成就菩薩が教えてくれる、

「目的を円満成就して空しからず」

「仏の身に成る」これが、人が、人としての究極の生き方のシナリオである。

わかりやすく言えば

菩提心…人の苦しみを見過ごせない慈悲心をもつて向上し続ける。

布施…足りるを知って、いつも恵まれない人に施すことを考えている。

般若…我執を断つ智慧を持ち、日々の暮らしを明るく過ぐす。

精進…いい加減なところで投げ出さず、自分の目的に向かって努力しつづける。